



本書は、前半で支援業務そのものの基礎論、後半で支援業務について現象学的質的研究を行なう際の手引きと他の質的研究法との関係を議論した、支援業務とその研究のための教科書である。

本書前半は、看護や福祉の支援業務を行なう人たちのための心構えを説く。死や障害に直面したクライアントに残された可能性を引き受け、彼(彼女)が生を有意義に全うすることをいかにして支えるかが支援業務の本質であるとする(もちろん「有意義な生」の追求は暴力にもなりうるが)。その際、著者は「実存」を強調する。実存が必ずしも現象学的ではない概念であるのは事実である。とはいえこれは、方法上の必然性をもつ。フッサール現象学は認識の理論として成立したのだが、支援業務に応用される場合には、認識とは別の

看護・福祉への現象学応用の可能性を追究

【評者】

村上靖彦

大阪大学大学院人間科学研究科准教授

事象をつかむための方法になるからである。まさに本書が「実存」と呼んだ何かが、看護や福祉の現場では焦点になる。本書における現象学の説明は、違和感の残るものであり、誤解を招く危険があるものだが、フッサールを読み替えてゆく作業に現象学の可能性を託すことは有益だと思われる。

後半は質的研究の手順を説明する。客観的事実、意味の把握から実存の意味の取り出しと状況記述へと進むモデルを呈示している。他のやり方もあるが、本書の呈示する議論はわかりやすい手引きの一つとなるであろう。

質的研究の際に大事なことは、「実存」が実体ではなく、多様で広範な現象につけられた仮の呼び名であるということである。実存は研究の目的ではなく、研究のターゲットにつけられた名前に過ぎない。それぞれの現場において出会われる実存の多様な「構造」を描き出すことが、現象学的な質的研究のめざすところであるだろう。ここでは、経験の構造という契機を、強調しておきたい。さもないと、どの事例でも「かけがえのない実存」「患者さんの有意義な生のために」の一言で終わってしまうからである。それぞれの現場における医療従事者や患者の経験は固有かつ個別的な構造をもつのであり、これを統計的処理とは異なる仕方、つまり内側から生き直して分節し直すという仕方、描き出すことが現象学的な質的研究の本義をなす。

同様のことは実存に伴う「意味」や「価値」についてもいえる。著者は研究の倫理・価値を強調するが、これらは自明のものではない。さらにいうと、倫理や価値は現象学に内在するものでもない。そうではなく、看護や福祉の現場が倫理や価値への問いを時に要請するのであり、現象学を適用した場合にこの要素が浮き彫りになるかもしれないということである。時には倫理や価値の問題が生じないこともあるであろう。質的研究について述べた頁で著者自身述べている通り(pp.115-116)、倫理をあらかじめ想定することはできない。

本書は本来認識の探求を目的としていた現象学を、応用するための実際のな手がかりを与えてくれているのであり、今後の研究のための一つの大きな参照点となつてゆくであろう。

質的研究のための現象学入門

対人支援の「意味」をわかりたい人へ

佐久川 肇／編著

植田嘉好子・山本玲菜／著

B5版・144頁・2009年発行

定価 2,520円(定価 2,400円＋税 5%)

医学書院(TEL: 03-3817-5657)

